The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛星での実践の経験
Author(s)	小泉, 朝未
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 86-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星での実践の経験

小泉　朝未

現在、洛星高校で臨床哲学講座の代表をしています。考える・物ごとを探究するのに、様々な方法があることを体験してもらうプログラムを考えてきました。日常の思考、学校でテストを解く時の思考や、普段の対人関係を講座にはそのまま持ち込むのではなく、個人個人が新たな発見＝「日常へのひっかかり」を感じられる場所を築こうとしています。このような方針は、多様なテーマを扱う外部の講師や大学院生をゲストとして迎え、対話やワークショップを実施してきた研究室の先輩から引き継いだものです。

現在は、プログラムを組み立てたり、各講座日の担当者を募ったりすることができるようになりましたが、最初は講座に参加していても、何が行われているのかよくわからないことがありました。哲学対話やp4c が行われているとき、疲れている様子の生徒や、話している人の方を向かない生徒に目が向きました。先輩に、生徒があんな様子で大丈夫ですか（うまくいってるんですか）と聞くこともありました。しゃべっていなくても聞いていないとか聞きたくないわけじゃないから、洛星の子たちは、と返事がきます。哲学をする、探究するといった言葉は、臨床哲学でよく聞きますが、初めはそれが一体何を指すのかもわからず、ふわふわとしたままだったので、先輩の返事にもあまり納得できませんでした。

大学でほんまさんが見せてくれる対話の実践では、前提や他者の思考の様式が明らかになります。世界への見方が、相手の発する言葉という身近なところから変わっていく、そうした気づきが面白いと思っていました。こうした気づきは、わたしが研究をしているダンスの場での、身体や他者への気づきとも重なり合うような面白さでした。面白いと思ったことをやってみようとしましたが、実際には対話中にわたしの意識が、対話されている空間から別のところに飛んでいってし

まうときもありました。生徒が発した言葉で自分の経験を想起し始めてしまうと、言葉が聞こえなくなるのです。よい対話を進行するはずが、勝手に自分がその場から脱出している状況に、焦ったり反省したりすることが多くありました。

対話の実践とダンスでの気づきが共通したように、考える方法はいろいろあるという信念のもと、演劇で、作文で、ダンスで、さまざまな授業を用意しました。いろいろ失敗もするし、ときには、よくわからないがわたしがやりたいことに生徒が同意しようと気をつかってくれているようなときもあり、いつも反省だらけです。

ただ、そのような経験を積み重ねるうちに、考える方法のなかでわたしが面白いと思っているのは、相手のことを知るためにという視点で、「あなたにとって・・・とはどういうことですか」と聴けたときのことだということがわかってきました。絡まり合っていた問題を一緒に解きほぐす作業ができたときには、問題を考えている個人の新たな一面だけでなく、問題の新たな一面が見えます。たとえばわたし自身の疑問、「しんどいときに人にどう対応するか」がテーマとなったときには、その問いが出てくる前提や判断基準を探るために、疑問を抱えるわたしにとってしんどいって何？人には友だちは含まれる？など、生徒たちが自分の経験と比較しながら問いを発してくれました。結果として、わたしが抱えていた前提「しんどいことを人に伝えるのは、はずかしいこと」が明らかになったときには、かなり驚き、そのとき直面していた問題への癒しとなるような事件も体験しました。

研究室は、こういうわたしの挑戦や疑問や試みを相談できる場所であり、また同じように挑戦する人を募集する場所でもあります。それまで対話に興味がなかったり、自信がなくても、学校に行くことを誘ってみることにしています。わたしもそのように学校への訪問を経験してきたので。

いま落ち着いて洛星の運営ができるのも、一緒に洛星に行ってくれたメンバー、一緒に代表を務め相談に乗ってくれた山本さんのおかげです。研究室は、学校や生徒の意向を受け取り、それに応答しようと

する学生の試みを、増幅させるように機能して欲しいと思います。それぞれの研究の知見や方法、研究室で行ってきた実践を使って。

補稿：洛星の実践から考える臨床哲学

哲学者は、さまざまな現象の中で、主題化されていない問題を前提から取り上げ、それを指摘し、概念を作り、言葉の厳密な意味や定義、論じるプロセスにまで注意を払いながら書物を記してきたのでしょうか。「哲学とは」、とまだわたしには論じることはできません。しかしながら、空間・時間・世界など壮大なものに向き合っていても、わたし自身の問いを見失わず（例えば「踊りは、知覚するということと何が違うのか」）、問い続けながら、哲学者の思考の道筋を把握する能力を身につけることが、臨床哲学に入り、わたしが「哲学」と向き合う際に努力したことでした。

研究するとき、通常はわたしと書物、わたしと研究フィールドでの事象との問いかけあい、対話が行われていますが、何を考えているかは目に見えません。自分の探究したいことがどのように書物のなかに現れてくるか、問いかけ続けながら書物を読みます。

学校で生徒たちと一緒に考える作業をするときには、声に出して質問する、自分ではない人がそれに応じ、答える。最初の質問、次の質問と何が行われていたのか、わたしも忘れてしまわずに、問いかけながら、複数の人々から考えが発達していく。それは「考える」過程を開いて見ているような感覚です。このときに、とても嬉しく感じます。生徒からは、はじめの問いで前提や定義を定めなかったから、統一された答えがでなかったと文句がでます。それでもわたしは、声に出された一言に根ざした個人の経験や考えの方法があるよ、他者の力を借りてそれを知ろうよという立場から臨床哲学をしたいと考えています。

臨床とは、なんですかと問われると、いまのところは、頭で考えていたら、一人きりの作業で、見えないことが、異なる人々が集まり作業することで、見えるように解剖する場とでもいえるでしょうか。ま

た、洛星では、普段の先生がたの教育があって、思考力を蓄えた行儀のいい生徒さんが待っています。機能を持って稼働している学校という組織のもとで、通常の文脈とは一緒ではないが、参加するひとが互いに参考になるような、考える作業を行うことも臨床だと言えるかもしれません。洛星での実践が臨床に達しているか、というのはまた考えてみるべきだとも思います。

ここまで書いてみて、自分の実践をいいように書きすぎではないかと疑問が湧きました。洛星の活動の報告も、自分自身の実践の進展も。クラスでなにをしたいか、きちんと想像しきれずに、向かった日は、途中で進行が崩壊しますし、他のメンバーに助けを求め、なんとか一時間をおえることもあります。それでも、活動は無意味でないと主張したいのは、わたし自身が感じる学校での生徒たちとのやりとりの面白さ、生徒から聞かれる言葉や思考の豊かさに根ざしています。そして、なにをやっているかわからないと内外から批判される臨床哲学だからこそ、面白いと感じているものについてはきちんと書き残しておきたいと思います。

（こいずみあさみ）